

小説

『ナクバの東』

荒葉 一也 著

1980年代始め、サウジアラビア王国のカフジ市で共に働いた三名のアラブ人の同僚―パレスチナ国籍のシャテイーラ氏、ヨルダン国籍のカテイーブ氏及びパレスチナ系ヨルダン国籍のザハラ氏―に捧ぐ。パレスチナ・スポーツを持続け、パレスチナをこよなく愛したシャテイーラ氏の祖国愛に深く敬意を表する。

## 目次

### プロローグ

第一部 イスラエル、イラン核施設を空爆す

第一章 未明の出撃

第二章 飛行ルートの誤算

第三章 パイロットのもう一つの敵

第四章 三羽の小鳥

第五章 ナタンズ爆撃

第六章 サウジアラビアの秘かな動き

第七章 「国境の南」作戦

第八章 さまよう三羽の小鳥

第九章 米軍乗り出す

第十章 砂漠と海に消えたダビデの星

第二部 エスニック・クレンザー(民族浄化剤)

第一章 退役将軍『シャイ・ロック』

第二章 パーティーにて

第三章 ユダヤ国家の内なる敵

(以下執筆中)

第三部 キマイラ (未定稿)

エピソード (未定稿)

## プロローグ

その写真を見たのは中東に向かうME514便のビジネスクラスであった。窓の外は漆黒の闇、真下を見ても灯り一つ見えない。マレー半島のジャングルの上空であろうか、それともインド洋の真っただ中なのか解らない。シート・ライトで腕時計を見れば目的地まではまだ数時間以上かかる。何杯目かのオン・ザ・ロックで意識も多少おぼろげになったのもうひと寝入りするか、と思いつつシートポケットにあつた英文雑誌を取り上げパラパラとページをめくる。

この手の雑誌の中東記事はほぼ例外なくパレスチナ問題である。ビジネスマンの彼にはたいして興味が無く見るのは写真とそのキャプションぐらい。そこには鉄製のフェンスを前にした3人の女の後ろ姿があつた。右側には汚れた服のかなり年配の婦人。左側にはまだ若い女性。そして二人には生まれた小さな女の子の三人である。年配の婦人は天を仰ぎ、わずかに見える横顔には深い嘆きの表情がうかがわれる。若い女性は両手でフェンスをわしづかみにし、まっすぐ前を見て体を震わせ大声で何かを叫んでいるようだ。

彼女の数十メートル先には一台の戦車が砲身をこちらに向けて静止している。イスラエル兵士の姿は見えない。戦車の中から双眼鏡で彼女を監視でもしているのであろうか。フェンスと戦車の間にあるのは地雷原である。小さい女の子は地面にしゃがみこんだままじっとしている。彼女は天を仰いで嘆く祖母も、フェンスをゆすって叫ぶ母親も目に入らないかのように一心不乱に地面を見つめている。三人とも彼らの後ろでカメラマンが自分たちの姿を撮っていることなどまるで気がつかないようだ。

写真のキャプションには『息子或いは夫をイスラエル兵に殺され悲嘆と怒りも露わな母親と嫁そして何も解らぬ無邪気な幼子』とある。

こんなことが今日もパレスチナのどこかで起こっているんだらうな……。

彼女たちはパレスチナに住んでいる平凡な市民。そう言う自分だってエリート・ビジネスマンのつもりでビジネススクラスの座席に座っているが、所詮は日本の何処にでもいる市民の一人にすぎない……。彼女たちも自分も生まれた場所が違うだけで同じ時代を共有している平凡な一市民(an ordinary citizen)。彼女たちは平凡なパレスチナの市民(Ordinary citizens in Palestine)で、自分は平凡な日本の市民(Ordinary citizen in Japan)と言いつつ何か。

Ordinary citizen in Palestine, Ordinary citizen in Japan, ……と頭の中で何度か反芻しているうちに、いつのまにかそれは OCIN-Palestine、或いは OCIN-Japan と言つ言葉に代わっていた。彼は自分と彼女たちが同じ OCIN でも境遇があまりにも違うことに一瞬身震いした。

しかし彼はその事実を突き詰めて考えるほどの思索家ではなかったし、何よりもうるさいエンジン音と朦朧とした酔いの中では身震いも一瞬のことではしかなかった。彼は雑誌を手にしたまま目を閉じると睡魔が彼を襲った。